松本は一枚の紙と萬年筆を持つて來て、眼をつむつてはしばらく鵜澤の顏の輪廓を思ひ出すやうにして、鵜澤の顏の特色を殊にはつきりと白い紙の上に描いた。松本自身でも巧く出來たと思つたほどの鵜澤のカリカテュアが出來上つたのであつた。

その顏を見た時、妻は『ほんたうに有田といふ男に似てゐますよ！』と言つた。

『或ひはさうかも知れない。たつた一圓貸してくれと言ふところからして、いかにも罪のない、善人のやりかただからなあハッハッハッ……』

その夜は、松本と妻は、ながいこと二人の心を蔽うてゐた暗い影をすつかり取り除いてしまつたやうな、愉快な心持ちになつてしまつた。

この秋、落葉樹の林のなかで鵜澤に逢つた時、鵜澤が松本の眼を恐れるやうに、急いで歩いて行つてしまつたことまでが意味あるやうに、松本には考へられたのであつた。

×

一ヶ月ばかり後の冬の日であつた。松本は突然社を辭してしまつた。

その以前から、松本の周圍には色々に不快な問題が起つてゐた。松本と一緒に雜誌社の仕事をやつてゐた人々の間で、あさましいほどのエゴイステイックな暗鬪が起つてゐた。疑ひは疑ひを生んで、お互が誰れ一人信ずることのできないやうな醜い渦卷が、小ひさな社のなかに起つてゐた。松本はその雜誌社のためには、誰よりも早くから關係して、誰よりも正直に、熱心に働いてゐたのであつたが、やつと基礎が出來上つた時は、彼は既に大した用もない地位に置かれてゐたのであつた。

かれよりずつと後から社にはいつて來た男で、かれよりは三つも年の若い小村は文壇的にも相當な地位を占めてゐた關係からと、尙一つは社主に對して如才ないやり方からして、編輯主任の仕事をやることになつた。

何か編輯上の相談會を開くにしても、松本は大抵除外されてゐた。

かれは社主や、若い編輯主任の命令通りに訪問に出かけて行つて、月々五つか六つの記事を作るより他に、何の仕事も與へられなかつた。

若い編輯主任の小村を圍んで社の人たちが、小村の月々の作品に對して追從的な批評をしてゐる時も、松本は隅の方でぢつと人々の顏を偷み見るやうにして、默りこんでゐるより外はなかつた。

『松本君はこのごろ一向お書きになりませんね。新らしい作を發表されたら何うです？』小村はよ

くこんなことを言つた。それが松本には非常に侮辱の言葉のやうに想はれてならなかつた。實際そのやうな場合には、主任の顏と松本の顏を見くらべて妙な笑ひ方をする男さへあつた。

『無能者！』誰れの眼も、誰れの笑ひも、松本に對してはさう語つてゐるやうに思はれてならなかつた。

松本は、少年のころからさうであつたが、ただ一人の友人と遊ぶか、でなければいつでも自分一人だけで遊んでゐた。かれは多勢のなかに交つて遊ぶことの出來ない人間であつた。

かれは旅行をしてゐても、見も知らぬ一人の旅人とたら快く語ることができた。しかし三人四人と集團のなかにはいつて行くと、かれは不思議に壓迫を感じるのであつた。かれはそのやうな場合には心から孤獨を欲した。

『人と人とが集まつて作り上げる社會では、人が一人でゐる時に見出されるいろ〳〵な人間的な親切さや、正直さは形もなく滅ぼされてしまふ。そこでは追從や、利己心や、陰謀や、中傷や、暗鬪や、人間の醜い獸的な方面だけが、赤裸々にさらけ出される！』かれは、社の內の人々を見るたんびにさう思ふのであつた。

『人生は戰ひだよ。愛だの、正直だの、親切だのといふのは生活が容易であつた昔の人たちの言葉だよ。今日のやうな生活の困難な時代に、そんなことが眞面目に行はれるものか。戰つて人を倒すか、自分が倒されるかだ。自分が勝つためにはどんな手段でも取るさ……』社の或る男は平氣でこんなことを言つた。

その男ばかりではない、社の殆んどすべての男たちがその言葉を實行してゐたのであつた。

『他人の手の中の物を叩き落してまで生きて行かなければならぬのが人生なのか。互に排擠し合ひ互に陷れ合つて行くのが、集團生活なのか。そしてそれより他には生活の方法はないのか……』かれは不快な心持ちを抱いて社から歸つて來る道々そんなことを考へて歩いてゐた。

松本は時々すべての人間といふものに對して絕望的な考へ方をした。人間は（無智だから利己的なのだ。無智だから卑劣なのだ）と語つた人があつた。しかし松本はさうは思はなかつた。かれの社に勤めてゐる人たちは、大抵高等の教育を受けた知識階級の人々であつた。それでも暗鬪、利己、排擠といふ點に於ては、勞働者階級の人々以上の醜さを示してゐた。『人間は到底、教育によつても藝術や宗教によつても救ふことはできない。人間そのものが本來救ふことのできない醜惡なもの

だ！』かれはかう考へることもあつた。

氣の弱い松本にはとても社のなかの空氣は、窒息しさうで、呼吸をつゞけて行くことはできなかつた。

『たとへ二人で飢ゑ死んでも宜い。不快な社は止してしまつて、原稿だけで食つて行くことにして見ようぢやないか！』松本は幾度同じ言葉を妻に語つたか知れない。しかし定收入を失ふといふことは、かれ等にとつては非常な打擊であつた。松本の周圍にはかれ等夫婦の他に、色々な貧乏な老人や女たちがあつた。その人たちの事を考へると月々の定收入を失ふといふことはたまらなく苦痛であつた。松本は一週間ちかくも夜晝考へ通しに考へた。そして夜も碌々眠らなかつた。

それでも松本は最後にいよ〳〵社を辭すことにしてしまつた。

その日は朝から雪が降つてゐた。松本は辭表を突き出してから直ぐに社の玄關を出て、街路を歩いて行つた。かれはほんたうに新鮮な自由な空氣のなかにのがれ出たものゝやうな快さを感じながら雪の往來を歩いてゐた。

しかし松本のこの勝ち矜つた心持ちは長くはつゞかなかつた。華やかな飾り窓の前に立つてゐる

幸福さうな人々の顏を見ると、松本の心は暗くされた。

『ほんたうに、俺は社を辭して、何うして、田舍にゐる老人や女たちを食はせて行くことが出來るだらうか？』と考へて見ると、松本は自分の行爲を後悔しない譯には行かなかつた。それは恐ろしい無謀な考へ方であつたことが氣付かれた。

かつて相當に文壇に名をうたはれた人々が、今日でもわづかに文壇の片隅に哀れな命脉を保つてゐるやうな悲慘な光景があり〳〵と浮んで來るのであつた。英語の力を賴りに飜譯でもして貧しい生活費を作り出す事の他には、かれには何の自信も浮んでは來なかつた。

『お前だつて人生の落伍者だ。お前は意志が弱いのだ。意氣地なしだ。何故お前は他の奴等と戰つて行けぬのだ？　今にお前のやうな意氣地なしは自殺でもするより他に途はない……』

或るものが松本の耳に囁くやうに思はれた。その刹那に松本の心には、あのぼろ〳〵の洋服を着て、臀がすつかり破けたズボンを穿いた鵜澤のことが思ひ出されたのであつた。

松本はそこにあつた店の硝子窓に自分の顏を映して見た。松本の外套は皺だらけであつた。縞の目も見えないほどよごれてゐた。カラーがくちや〳〵に垢染みてゐるのが殊にいた〳〵しかつた。

一週間餘も剃刀をあてたことのない顏は、まるで病後の人のやうに蒼白かつた。脣の下の貧乏くたい鬚が直ぐに鵜澤のぼしや〳〵の鬚を思ひ出させた。

『何といふあはれな眼！　何といふ見すぼらしい顎！』松本は硝子に映つた自分の顏をしばらく見つめてゐた。自分自身の衰へた姿が、鵜澤そつくりのやうに想はれた。

かれは、しばらく俯向いて街を歩いて行つた。

かれは何處かにかすかな希望の光りでも見出したいと思つた。かれはこなひだ訪ねて行つた新聞社のことを思ひ出した。T氏にあづけて置いた原稿のことを考へた。

T氏が、(もし、明日の新聞から續けて載せますとでも言つてくれたら、どんなに嬉しいか知れない)とかれは思つた。さうして、それが屹度事實となつてあらはれて來さうでならないやうな氣もした。

かれは辭表を出したことも忘れて、新聞社の應接間にはいつて行つた。T氏は二階の編輯室に來てゐるといふことであつた。かれは希望と不安の二つの心に苦しめられながら十分あまりも、暗い應接間に待つてゐた。隣りの應接間では賑かな笑ひ聲などが絶えず聞えてゐた。

松本は殆んど待ちあぐんでゐた。T氏のかはりに一人の給仕がはいつて來た。そして『今日はお目にかゝりたいのですがた、ゞ今恰度非常に火急な事件が出來たので、その原稿を書くために、ちよつと手が明けられませんから、失禮いたします。先日の原稿のお話でしたら、只今急には困りますから、少しお待ち下さるやうに……』といふ意味のことを話して、少年はさつさと二階へ上つて行つた。

松本は兩方の脚がまるですくんでしまつたやうに思つた。かれは歩くのさへ困難であつた。

往來の人たちは、忙しげに雪のなかを、活氣に滿ちた足どりで歩いて行つた。そして、誰もが松本の上に侮蔑の視線を投げかけて行くやうに思はれた。松本はこの廣い都會に一人の友達も持つてゐないことに氣付いた。かれには急に世界が墓場のやうに寂しく思はれた。かれは、誰でもいゝから、心から打解けてその悲しい心や、賴りない心を語り合つて見ることのできる友達が欲しかつた。

鵜澤のやさしい眼や、善人らしい微笑が、松本の頭にはつきり浮んで來た。松本は急に鵜澤に逢つて見たくなつた。

松本は、鵜澤を疑つたことをほんたうに心から後悔した。

『鵜澤なら屹度よろこんで、逢つてくれるにちがひない。』とかれは歩きながら思つた。

雪は日暮方に近づくにつれて段々積つて行つた。彼を追ひ越して、電車や、自動車がはねを飛ばして通り過ぎて行つた。

どんなに苦しくても、侮辱されても、安心して食つて行けるだけの定收入を持つといふことが、ほんたうに幸福であるといふやうな考へが幾度もかれの心に頭を擡げて來るのであつた。あの辭表を社主が、も一度突きかへしてくれゝば宜いが！』といふやうな意氣地のない考が、かれの胸に泛んで來ることもあつた。

『俺は何故社を辭したか？』と再び松本は考へて見た。『俺は人と爭ひ、疑ひ、排擠し合つてまで、パンを得るために社にゐるには忍びなかつた。だから俺は社を辭めてしまつたのであつた。けれども人間が生きてゐる間、そして集團のなかにはいつて人々と一緒に働いてゐる間は、そこに本能的に爭ひがあり、疑ひがあり、排擠、暗闘がある。それが人間生活の常態なのだ。暗闘や排擠や疑ひや、嫉妬を恐れるなら、永遠に社會の中にはいつて行つて生活することはできない。生そのものが爭闘なんだ。奪ひ合ひなんだ！』

或る聲がかれの耳にかう囁くのであつた。

『まつたく、さうかも知れない。しかし俺にはそんな苦痛な我慢はできない。やつぱし俺たちのやうな意氣地なしは社會かち自滅して行くより他には方法がないのかも知れない！』

さう考へると一層、松本は鵜澤に逢つて見たくなつた。

『もし俺が鵜澤と同じやうに、あの貧乏の淵まで落ちて行つたなら、俺自身、自分の友人の家に行つて、有田と名乘つた男がしたやうな手段で金を借りるかも知れない。俺には盗むだけの勇氣はない。鵜澤にもそれだけの勇氣はない。鵜澤には大きな金高を騙るやうな勇氣もない。俺にもそんな勇氣はない。』

こんなことを考へてゐると、有田と名乘つて來た男が、たとへ實際には鵜澤であつても、或ひは誰れであつてもその行爲は決して惡いことでも、何でもない、それはほんたうに自然なことであるやうに思はれてならなかつた。

かれはむしろ、その有田といふ男が、ほんたうに鵜澤であつてくれゝば宜いとさへ思つた。

松本は雪のなかをぐん〳〵歩いてゐた。

かれは、こなひだ、新聞社の編輯室で逢つた翌日、鵜澤が『あんな失禮なことを御相談してまことにすみませんでした』とわざ〳〵手紙をよこしてくれた折の事などを考へながら、手紙の上書きに書いてあつた町の名を目あてに、四谷の方へ歩いて行つた。

中學の寄宿舍時代に意氣地なしであつた鵜澤のことが色々に思ひ出された。

×

並行棒の上に兩腕をかけたまゝ、幾度教官が臀を持ち上げてやつても逆立が出來ないで、そのたんびに、『臆病者が！　そんな意氣地のない奴は何になつても駄目だ！　碌な人間にはなれない！』と叱られてゐる少年があつた。それは鵜澤であつた。

『こゝにも一人の臆病者がゐる。並行棒の逆立が出來ないで何うする』さう言つて、色の黑い豫備の曹長は一人の少年を叱りつけた。そして自分自身、いかにも手際善く、並行棒の上に逆立をして輕く靴と靴とを叩いて見せた。小さな砂が靴の底からぱら〳〵と落ちた。

二人の少年は涙ぐんだ眼をして軍曹を見つめてゐた。その一人の少年は松本自身であつた。

松本と鵜澤とは機械體操ごとに、思ひ切つた運動ができなかつたので、教官に叱られては、他のクラスの男たちが、草の上にしやがんで中休をしてゐる時も、砂を嚙ませられるやうな目に會つたり、運動場を幾回も走らせられたりした。

また松本の頭には日暮れて行く中學校の教室の窓からつくねんと、空や平原を見てゐる二人の少年の姿が映つて來た。それもかれ自身と鵜澤とであつた。

修身の時間に校長は『煙草を喫んだことのある者は手を擧げろ』と言つた。誰も顏を見合はせたが手を擧げるものはなかつた。二度校長は『煙草を喫んだ者は……』とやゝ強い語氣で言つた。眞つ先に鵜澤が手を擧げた。松本もつゞいて手を擧げた。松本と鵜澤はその數日前始めてバットを買つて、池の畔でむせびながら、喫んだことがあつたのであつた。殆んど級の中の大部分が煙草を喫んだのであつたが、誰も手を擧げなかつた。鵜澤と松本とは正直に手を擧げたばかりに三日間の禁足を食つたのであつた。

その時手を擧げなかつた不正直な男たちの中で、今では立派な參謀官や裁判官になつてゐる級友のことなどが、松本の頭に浮んで來るのであつた。

×

松本が四谷の××町に行つた頃は日が全然暮れて終つてゐた。松本は彼此れ一時間以上も家を探さなければならなかつた。

『もし有田と名乘つて來た男が鵜澤だつたら……』さう思ふと松本は可笑しくて耐らなくさへなつた。松本は雪のなかでくす〳〵と獨り笑ひさへしたこともあつた。

松本が鵜澤がゐたといふ家の前に立つた時は、松本の手の指も、足の指もちぎれさうに冷たくなつてゐた。破けたかれの靴の底からは冷たい水が、足を動かすたんびに氣味惡く染み込んで來た。

青ぶくれしたおかみさんが、くすぶつた格子戸の中から出て來た。そして、

『その方なら、もう二十日ばかりも前に何處かへお引越しになりましたよ。さあ、何處にお引越しになりましたか。何でも病氣の奥さんやお子さんとは別々におなりなすつたといふことです。奥さんとお子さんはお國の方へおかへりになつたやうです。奥さんとお子さんとお立ちになつてからもしばらくはお一人でおいでになつたのですが、滅多に家に歸つておいでになるやうなこともなかつたのです……夜逃げ同様で一人で何處かにお出でになつたやうですよ』とそれだけ話して、おかみさんは格子戸を締めてしまつた。

松本はぐつたり疲れた足を引き摺つて、電車の方へ歩いて行つた。

雪がすつかり道をも、家をも埋めてしまつてゐた。

停電でもしたのか、電車は一臺も來なかつた。そこいらには歩いてゐる人影もなかつた。

曠野を想はせるやうな雪のなかに、高い柱の上の電燈がところ〴〵に瞬いてゐるのが、黄色に見えた。

大正十年十一月十日印刷
大正十年十一月十五日發行
（定價金壹圓八拾錢）

◀光　落　日▶

著作者　東京市牛込區矢來町三番地　吉田絃二郎
發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮
發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話番町　八〇七番　八〇八番　八〇九番
振替（東京）一七四二番

印刷所　東京市小石川區西江戸川町五九二番　富士印刷株式會社
電話小石川　印刷者　佐々木俊一

吉田絃二郎氏著作

■長篇小說 **無限**

四六版假裝、五百二十頁
價貳圓貳拾錢、送料拾貳錢

第五版

淫蕩の血に呪はれたる無賴漢を兄とし、トルストイアンなる若き理想家を弟とせる多情多恨の一青年が戀に惱み運命に悶ゆるの終始を描けるもの。規模の雄大、結構の複雜、而して興味の深きは、「カラマーゾフの兄弟」の俤ありと稱せらる。

■長篇小說 **人間苦**

四六版假裝、紙數二百頁
定價壹　圓、送料　八錢

第拾貳版

人間生活の苦艱を描いて、滿眼の涙を世の哀れなる男女に注ぎつゝ、しづかに運命を觀じて人生の歸趣を想ふ。まことに是れ魂を以て描き、血を以て描けるの小說と申ふ可きものたり。添ふるに名作の名高かりし「疲れたる魂」の一篇を以てす。

■短篇集 **大地の涯**

四六版假裝、三百五十頁
定價壹圓七拾錢、送料拾錢

第七版

イエス・キリストの生涯を描ける大作「大地の涯」を卷頭として、作者近業中の傑作「清作の妻」、「初戀のころ」等九篇を收む。精刻を極めたる人間苦の描寫は、高調なる人間愛の謳歌と相俟つて、純眞のヒユウマニズムを成せるを看ん。

吉田絃二郎氏著

慈眼愛腸の詩人にして哲人的風格を有する吉田氏の詩味哲味宗教味溢るゝ感想の集也。

■感想集 **小鳥の來る日**

四六版二百七十頁
定價金壹圓貳拾錢
郵送料　金八錢

忽ち十版

（目次）▼寂人芭蕉▼路上素畫▼郊外に住みて▼柔かな草▼私は生きたい▼自然に還る日▼春日抄▼涙の味を知る人間の生活▼心の影▼草の上の學校宗教藝術▼筑紫の秋▼冬日抄▼修善寺行▼眞人間となるまで▼一本の葱▼濁つた川▼榛名小學の先生へ▼冬の歌▼素直な心▼自分の魂の爲に▼藝術に潛む新生の力▼南國の町と島▼一人で歩く道▼クリスマスの鐘が▼千住の市場▼貧しき者の春▼供養の心――以下略す――

佐藤春夫氏著

■**殉情詩集**

自畫自繪
口絵三色版

▼四六版極美本
▼著者裝幀特製
▼定價金九拾錢
▼郵送料八錢

佐藤春夫氏が祕して示さゞりし詩稿を得て此の美くしき一卷を編む。その哀婉、その悲涼、四歐大家の風格をしのばしむるものあらむ。

聞き給へ、われ今日人生の途半ばにして愛戀の小唄き森蔭に到り、わが思ひは轉た落寞たり。わが胸は輞の下に碎かれたる薔薇の如く呻く、心中の事、眼中の涙、意中の人、兒女の情われに極まりては偶成の詩歌乃ちまた多少あり、げに事に依りてわが身には切なくもあるかな、わがこの歌。（自序の一節）

ツルゲエネフ全集

(1) ■獵人日記　生田長江氏譯　▼定價貳圓▼送料拾貳錢

(2) ■ルーチン（附）彼等の手紙　田中純氏譯　▼定價壹圓卅錢▼送料八錢

(3) ■初戀「ファウスト」、「クニラミリツチ」　生田春月氏譯　▼定價壹圓卅錢▼送料八錢

(4) ■その前夜　田中純氏譯　▼定價壹圓卅錢▼送料八錢

(5) ■煙　大貫晶川氏譯　▼定價壹圓卅錢▼送料八錢

(6) ■父と子　谷崎精二氏譯　▼定價壹圓卅錢▼送料八錢

(7) ■ブーニンとバフリン（附）餘計者の日記、ミシヤ等　布施延雄氏譯　▼定價壹圓卅錢▼送料八錢

(8) ■處女地　田中純氏譯　▼定價貳圓▼送料拾貳錢

(9) ■春の波　生田春月氏譯　▼定價壹圓卅錢▼送料拾貳錢

■世界文藝全集

約一百卷の豫定、空前の大叢書也。四六版總洋布大金最上製一冊六百頁定價一冊貳圓五拾錢送料一冊拾貳錢

第一編　フロオベル著、中村星湖氏譯

ボヴリイ夫人

ボヴリイ夫人が、やる方なき愛慾の惱みより、遂に墮落の深淵に陷るの徑路を描ける、世界稀有の一大傑作にして、近代小說の經典と稱せらるゝもの也。

第二編　ゲエテ著　中島清氏譯

ギルヘルム・マイステル

美貌世に稀れなるマイステルが幾多の女性に慕はれて、多情多恨の戀に身をつくすの傳記を描き、紅紫繚亂たる稀有の大戀愛小說、（全二冊上卷發賣中）

第三編　メレジュコフスキイ著　米川正夫氏譯

神々の死

基督教に對して手套を投じたる偉大なる最初の挑戰者ジュリアン皇帝の苦悶の生涯を叙せる、高華雄麗の小說也。三部作「基督と反基督」の第一編とす。

第四編　ストリンドベルヒ著　阿部次郎江馬修氏譯

赤い部屋

作者が青年時代の實際經驗を活寫す。「赤い部屋」に集れる若き藝術家の群を描き、哀れにして清純なる戀を點ず。人間生活の實相は赤裸々に現れ來る。

16027
エ

・トルストイ著作・

■戰爭と平和　昇曙夢氏譯　米川正夫氏譯　▼一冊貳圓五拾錢全三冊▼送料一冊拾貳錢

■アンナ・カレニナ　原白光氏譯　▼一冊貳圓參拾錢全三冊▼送料一冊拾貳錢

■復活　中島淸氏譯　▼定價參圓▼郵送料拾貳錢

■我が懺悔　相馬御風氏譯　▼定價九拾錢▼郵送料六錢

■人生論　相馬御風氏譯　▼定價五拾五錢▼郵送料四錢

■性慾論　相馬御風氏譯　▼定價五拾五錢▼郵送料四錢

■光あるうち　光の中を歩め　阿部次郎氏譯　▼定價五拾五錢▼郵送料四錢

■トルストイ日記　昇曙夢氏譯　▼定價六拾五錢▼郵送料六錢

■トルストイ書簡集　石田三治氏譯　▼定價六拾五錢▼郵送料六錢

終